

# 史料



## 江戸時代の道路を往く (二)

路邊から展望せる江戸時代の姿相

渡部 英三郎

次に農村部落、また宿場等に於いては商業が如何なる情態に在つたか、農村は土地經濟を本體とする生活の舞臺であつて、全く都市と事情を異にすることはいふまでもないが、然し其處にも時代の波は浸潤しつゝあつた當時の道路を頻繁に往還去來しつゝあつた。商人の姿はまた一面に於いて、全國の農村にも波及しつゝあつた時勢の影を宿すものでなければならぬ。

村落の姿相、特に商業の發達(商人の旅行との聯關に於いて)松並木が美

しい枝を翳したり、一里塚の榎がこんもりと繁つたりしてゐた街道を往來せる江戸時代の旅人等は一里、二里、半里、十町といつたやうに、近く遠く、不規則的な距離を隔て、沿道に點在してゐた、動きの少い、靜的な村々を通過したのであらう。其處は當時の治世者によつて、

百姓は天下の根本なり。是を治むるに法有、先一人々々の田地の境目を能く立て、扱て一年の入用の作食をつもらせ、其餘を年貢に收むべし、百姓は財の餘らぬ様に不

足なきやうに治むること道なり。<sup>(1)</sup>

「註」(1)「本佐録」——徳川幕府初期の元老の一人本多正信の

著

といふ記述に示されてゐるやうな方針の下に治められてゐた封建政治の經濟的地盤であつたのである。餘財を生ぜざる程度までに課税の率を高めて置くことを以つて治民の原則とせる幕府の治下に在つたのであるから、其處には豊かな生活が在る譯はなく、例へば沿道近い田畑に圍まれたり、山根に寄る樹木の間や、川添ひの附近などに隨所に見受けられる農家の有様は、特異の場合を除きケンペルが農家は粗末にして小なること、其建築は數條の筆にて描寫し得る程なり。<sup>(1)</sup>

「註」(1)「ケンペル江戸參府記」

と形容してゐるやうな簡單な粗末なものであり、「賤が伏屋」の文字に相應しきものであつたらしい。殊に山村で耕地が少いか、または山林、秣場、葎場、萱場等、農家の餘收を求める財源のない貧しい村々等は「落穂集」が

或は四壁もなく家居垣等も破れいとはず、庭の構ひ、草深く見ゆるは困窮の村なり又村に入り何んとなくそうそうとして見すかす如くにして、物淋しき體なりは至つて困窮の村なり。<sup>(1)</sup>

「註」(1)「落穂集」——寶曆年間著

と記述してゐるやうな村々であつたことは明かであつて、其處には肅條とした寒々しき情景が展開されてゐたであらう。田地に恵まれぬ山村の貧しさは「民間省要」の著者が涙を以つて描いてゐる。

山中野方の村里の田作る無き所に米といふ物なければ歳神の備へにも米の餅といふ事を一生目に見ぬ所も多ぞかし。只粟の餅を以つて神々の備へもとる。かゝる所にしては其村重等適々米の餅を見ては一偏に金玉の如くにするなり。

の記述によつても想像されるであらう。

そしてそうした村々に住む百姓は、現在の農村などからは次第に姿を没し、今はたゞ故老の物語りにのみその面影

を傳へられるやうな夜を日についで専らに働き續けることを生活の凡てとして生死する型の人々であつたことは、

夜仕事は八月十五日夜より初まり、同月より九月十三日夜まで片夜職といひ、九月十三日夜より本業にして半日の業を勤む俗にこれを本夜職といふ。<sup>(1)</sup>

といふやうな記述や、または、

此節男女毎日田を搔の爪皆へりて指先より血を出す多し、如斯男女晝夜の境なく年中農事に骨を碎くと雖……と記せる當時の文献によつても一斑が知られやう。<sup>(2)</sup>

然し、それにも拘らず、前掲せる「本佐録」が記せるやうな治民の原則下に置かれた運命は彼等の生活を、僅かに一、二回の參府旅行往還の途中に於いて、駕籠の中から瞥見したに過ぎない外國使臣等の目にさへ、

家の中には僅かの道具手飼の鶏あり、また子供の多きと貧賤の著しきを見るべく……<sup>(3)</sup>

といふ記事の如くに映せしむる種類のものとしたのである

「註」(1)「本朝地方春秋」

(2)「民間省要」

(3)「ケンベェル江戸參府記」

そうした環境に在つた、村の人々は、また一面「民をして依らしむべし、知らしむべからず」とする封建政治の原則下にも在り、心智研磨の機會を得られなかつたがために、その知識教養の程度は一般に甚だ低く、隨つて其處には、心智の輝きもなければ、教養の香りも薄く、たゞ批判に曝らされることなき傳統と迷信とが、彼等の生活を根強く支配してゐたのである。

それ百姓の田地漸く二石、三石、十石位迄の田地を持つて渡世する者ばかりある村には一向の土地にて算筆も知らず、諸事不埒成ものなり。間に高持の百姓又は商を兼ねたる宜しき者の交り居たる所は公儀向の法令も聞知て御年貢諸役の算筆も明らかに諸事しまりてよし。<sup>(1)</sup>

「註」(1)「民間省要」——享保年間の著。

右の記事によつてもその一般が窺知せられるであらうやうに、享保年間の頃に於いては、貧農、小農から中農まで

をも含め、殆ど無學の狀態に在り簡單な算筆をすら知らなかつたのである。高持の百姓が商業を兼業して暮向きの富裕な者でも居ない村に在つては、一村中、そうした單純な知識の有主すらも殆ど絶無であつたといふのであるから、今日から見れば眞に隔世の感ありといふべきであらう。

また、民間省要の著者であり、幕府の循吏でもあつた田中丘隅が、同書の中で、百姓の置かれてあつて立場に就き、

百姓といふ物、牛馬にひとしく辛き政に重き賦税をかけられ、ひどき課役をあてらるゝといへど更に云事ならず是が爲に身代を潰し妻子を賣り或は病を蒙り、命を失ふこと限なしと雖罵詈擲に逢ふて生き過す。

と記してゐるなどは、封建の世に農村に住む人々の置かれてあつた不幸の一面を、稍誇張して強調せる傾があるにしても、當時の世相の一端を示すものであつて、尾張藩主、徳川宗春が當時漸く煩瑣を極めつゝあつた苛烈なる封建警察の現象に批判の目を向け、

萬の法度號令、年々多くなるに隨ひ、自然と背く者もま

た多く出来て、法令愈々繁く煩しき事になり、斯の様子にて數十年を経るならば後には高聲にて咄しすることも遠慮するやうに成間敷もしにてなし、其外一切の作法、諸役所の取扱迄も右の通なればあげくには夜寝の間もなきやうに成らんか。第一法令多過ぎれば、心いさみなくせばく、いじけ道歩行にも跡先見るやうになり、常住迷懷のみにて暮らし、自然と忠義の心も薄く成まじきものにてなし。(傍點) (筆者)

「註」(1)「溫知政要」——享保十六年著。

と述べてゐるなど、併せ考へ、言論の途が塞がれ、且つ民意を表現す可き政治的機構を缺くことを以つて一つの特色とせるこの封建專制の世に於いて、村人の生活の上に重苦しく漂ひ流れてゐた陰鬱な空氣を想見すべきであらう。勿論後者の場合は農村部落に住む者のみに關する記述ではなく、當時の社會全體の姿相の一面に就いての考察であるが徳川幕府の農村に對する政治の方針等から考へ、斯様な世相は寧ろ農村に於いて一層濃厚な色を見せてゐたことであ

らうと推察せられる。旅人等の眼前に、靜かな、美しい景色を展開して横はつてゐた街道筋の村々、そして機械文明の騒音と激しい動きとに疲れた現代の人々から一の叙情詩として振り返り眺められ勝ちな當時の農村も、決してそれ程明朗な、幸福な生活の場所であつたとは考へられないであらう。

然しまた他の一面、其處には機械文明の波に因つて激しく揺り動かされてゐる現代の農村には見られぬ靜かな長閑さと素朴さとを有つ世界があり今日では、秋風が立つて稲穂が重々しく垂れる頃に村々に樹てられる鎮守祭禮の長旗や山深い地方の村芝居の太鼓などに僅かに面影または形體を留めてゐるに過ぎないあの「村の情景」によつて表徴されるやうな、鄙びた幸福もあつて、村々の辻や路邊などに見る百姓の面貌にも、現代の農村人のやうな神經ツぼさが見られなかつたであらう。ケンペエルが江戸旅行の途次農家の生活を眺めて、

而かも住む人々は少しの米や多くの野や森の蔬根の貯藏

を擁して優々と其の生活を樂しみてあり。

「註」(1)「ケンペエル江戸參府記」

と云つてゐるなども決して農民生活の實情に疎い、外國人の薄ッべらな觀察としてのみ見るべきではないであらう。即ち當時旅人等が行く先々で通過し、または街道近く眺めて過ぎたであらう、村々には、重苦しい封建社會の空氣が淀んでゐたにしても、後の時代に見るやうな焦燥や神經ツぼさはなく無知と素朴とに織りなされた長閑さが其處を支配してゐる場合が多かつたであらう。

要するに江戸時代の農村はそうした生活の舞臺であつたが、然しやがて時代の動きは遅々としてゐるが其處にも動きつゝあつたのである。中央集權的政治(封建政治の形式に於いて行はれて)の永續、それと表裏せる孤立的な地方經濟から國民經濟への推移發展、隨つて物資の全國的な移動、その必然の結果としての貨幣經濟——商業——の發達等に、そうした社會經濟發展の過程は農村にも次第に其反映を見せつゝあつたのである。

江戸時代に於いても、農村に住む者が純然たる百姓ばかりではなく、殊に町近き邊りなどでは種々の職業を有つ者や、時には遊民の類さへ居たものと見え、貞享年間頃の代官心得を記せるものに、

遊民なきやうに僉議すべし、士農工商の外儒、佛、醫などはありてよし。禰宜神子占師。其外町にも百姓にもむざと方々ありき廻り、何わざするとも不<sub>レ</sub>見、悪事を仕出し、百姓をせぶらかし、博奕をすゝめ、村々の衰微の基より、神主などの有來候は不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>是非。醫者は何人もよし無<sub>レ</sub>之はまねき置てよし。

「註」(1)「豊年稅書」——貞享年間の著。

とあるなど記してゐる。これ等は當時に於ける農村の構成を知る上の一資料であつて同時に、この時代に於いても、農村中にはその生産力が(恐らくは比較的豊かな村)、斯種の直接生産に従事せざる人々を養ふだけの發展をしてゐたものもあつた事實を示すものである。

それは兎も角、貨幣經濟發達の波が、農村に及び、從來

行はれて來た物に交換の經濟組織が元祿年間頃から次第に貨幣による賣買に變じて來たことは、

其上昔は在々に殊の外錢拂底にて一切の物を錢にては不<sub>レ</sub>買、皆米麥にて買たる事某田舎にて覺たること也。

近年の様子を聞合するに元祿の比より田舎へも錢行渡りて錢にて物を買事になりたり。

「註」(1)「政談」——荻生徂徠著。

と記してゐる文献によつても知られる。斯様に田舎にまで一般に浸潤しつゝあつた貨幣に依る取引の方法は自然に商を職業とする者の發生を促がさずには置かない。

農家の人民奢侈するは國々城下の外に、二、三里宛の間に町場有、毎月六度十二度の市日あり。在家より賣買の貨物持運んで營の用度を辨ぜし處に、近來連々、在家殊に(註)商人出で酒屋は勿論、百貨を賣買する故に居ながら自由足りて奢侈し……

「註」(1)「世營錄」——天明年間の著。

右に引用せる「世營錄」の一節は、征前二、三里毎に位

置してあつた市場に於いて行はれた物に交換の方法が廢れ、村々毎に商人が出現して店舗を構へた有様を物語るであらう。そしてそうした情勢は年代の経過と共に益々發展し重農主義的思想の有主であつた當時の識者に絶えず不安を感じしめてゐたことは「粟山上書」が、

老人共の物語承り候得へば二、三十年以前よりは商人殊の外多く相成候由にて御座候、農人の商人に相成候事は殊の外天下の衰微に相成候事にて、了間も御座候人は甚だきらひ申事にて御座候。

と云ひ、「經濟隨筆」が、

百姓の中には、商をする者近世村毎に多くなり、善からぬことゝなり。此風俗も改めたきものなり、百姓には農業ばかりさせたきものなり。

と記してゐるなどによつても其一端が窺はれる。

「註」(1)「粟山上書」——寛政年間。

(2)「經濟隨筆」——文化年間頃。

斯如き事態は、それ／＼多少の程度に於いて、農村の生

活を變化せしめてそれを都會化し、封建社會の爲政者がしきりに要望してゐたやうな純農村の姿相は次第に崩壞の萌芽をはらみつゝあつたことを示す。例へば、

若者の鞆骨折ることを嫌ひ東都並繁花な町々へ出で、骨折らざる稼する鞆多く、水呑みたる百姓の子供たりとも田家に奉公する者なき故、田所を持、人抱て耕せし農民二十年以前迄は男給金は一兩二分位(註)、女三分位なりし所に近來男四兩女三兩位に成り、因つて人を抱耕しては不<sub>レ</sub>引合、人少にて耕す故田所の養ひ手入不<sub>レ</sub>行届、

地所疲れて登り薄く、連々衰微して古より田所多く持たる農民多く潰れ、田所の竈滅じ田所は荒れて山林となるなどゝいふ、數年前の頃まで田舎廻りにやつて來た青年指導者と稱する人々のよく演じた講演の一節にでもありそうな記事の見るのは、貨幣經濟の浸潤が當時の農村の生活相に及ぼしつゝあつた影響を考へる上に極めて興味深い。また、商賣により、目前に得られる利得が、即ち貨幣經濟の作用が、目先の利く百姓にとつて、如何に強い魅力であ

つたかは、

近來農家に居りながら工商の職を稼とする者多くして田所荒れるなり、商工の職は其日ノ利を得る所見へて營易く面白さが故……と記する文献などにも其片鱗が窺はれよう。

「註」(1) 及(2)「世替録」

斯様な貨幣が有つ魅力は比較的有能な百姓を商業に轉ぜしめ、または商業を兼業せしめる傾向を生じ、其處に於いても彼等を財力的に優越な地位に置くこととなり、却つて古來の高持百姓を壓倒するに至つた様子は、

村々に古來よりの百姓の代々持ち傳へたる田地屋敷は世上に稀なり。

當時爰かして村々に適に身代宜しき百姓の有は皆以て田地ばかりの類にならず皆外に商賣を兼帶するなり。我朝の中に金の百兩共引廻る物の分、或は市場町場の商人か、所々津湊の船持か、邊土に於いては酒屋糶屋の類か、かし金をする輩か近年はやる物仕の類か何れ此の外の類に

出でず。<sup>(1)</sup>

「註」(1)「民間省要」

と記せる記述の中に明かに察知せられるであらう。即ち、農村の富の中心も、古い門構や黒く磨き抜かれた大黒柱などによつて表徴せられる物持の舊い農家より、振分荷物に股引脚絆で商品の注入や行商の旅に上る商人へ推移しつゝ、あつた事實を窺知せられる。斯様な事態の變化は、いふまでもなく貨幣經濟の土地經濟に對する壓迫に基因するものであつて従來、純粹な土地經濟の時代に在つては「稼ぐに追付く貧乏なし」の格言が如實に示すやうに、丹誠と勤勉とは、それだけ多くの收穫を收めそれを貯藏することを得せしめたのであるが、これを貨幣に代へて、更に他の必要品(例へば衣服、酒、油その他の用度品等の如きものを)を買はなければならぬ事情の下に置いては、事態はそれと異なる。即ち物價の變動如何に因りては、多量の收穫物も必ずしも多額の收入を意味せぬこととなるからである。斯うした經濟上の現象が既に當時の社會に於いても明かに現



はれ、識者の注意を惹いてゐたことは萩生徂徠などが、大名及武士階級の貧困化の原因を論考せる場合に度々云つてゐる所によつても知られるしまた熊澤蕃山が其炯眼を以つて時代の經濟的變化を觀察して、

江州にて鰯を買ひ先年は米壹荷物持行て貳荷取り來りたり。近年は米二荷物持行て鰯一荷取來れり。米下直なる故より萬事如し此なれば其餘を推して知るべし、民は凶年の高直なるには賣るべき米なければ用にたゞす豐年には米の直よからねば息をつくべきやうもなし……故に新田などおこすことも今の勢にてはよからず。<sup>(2)</sup>

「註」(1)「政談」——萩生徂徠。

(2)「大學或問」——熊澤蕃山。

と喝破せられるによつても明かに察せられる。當時に於ける滔々たる新田開發の大勢に抗して生産の制限によりて米價の下落を防止すべきことを主張せるものであつて、つひ數年前にやかましく論議せられた米作耕地の制限論を彷彿たらしめるものがある。それは兎も角、熊澤蕃山の時代

(元祿年間に死去)に於いてさへ既に斯如き現象が現はれてゐたとすれば、幕府の中葉以後に於ける貨幣經濟の浸潤は可なり一般的のものであり、隨つて純農村の姿相は斯様な時勢の推移に因り、相當ゆがめられつゝあつたものと考ふべきであらう。

かくて貨幣の機能を利用し米價が、商人に有利に變動せられるに至つたばかりでなく、農村に商店が増加して來た結果、所謂農民の生活向上を齎らし益々農家の支出を増加し、彼等の生活を窮乏に導いた様子は、

近年世につれて娘一人を持ても是を片付けるに分限不相應に物に入る事夥し。其の仔細は三十四、五年已前迄は田舎にて人に知られたる百姓名主年寄に至るまで、娘をやるにつゞら一荷を馬につけ、もうせんに緋の紫のふとん、衣類も上着一つにて、とりやり相濟み、送り迎ひも馬にてせし故金子五兩三兩にて相濟み、十兩も入る婚禮は人の目を驚かしたるに、いつしか彼の兼帯の百姓(註)商を兼ねる百姓物仕の類有徳成者より段々と事至りては、のり物と

或つゞらこの外長持、たんす、皿鉢、重箱、椀、かぐの類、一切の諸道具に至る迄御歴々の御祝言にひとしく……これより借金を仕出し、果ては潰となる事多し。<sup>(1)</sup>

「註」(1)「民間省要」

など、ある記述によつても窺はれよう。かくて現在でも地方の農村に遺存する「娘を三人有てば身代が潰れる」といふやうな、收入に不相應な浪費を伴ふ婚禮の習慣は既に當時に於いて萌芽を發してゐたことが判るであらう。そして斯如き傾向は獨り婚禮に關してばかりではなかつたのである。殊に東海道などの主要街道の沿線に於いては商業の發達は一層著しく、そのほとりに連る村々は、既に純農村の姿を止めず恰かも、今日の田舎町などに見られるやうな、半農半商其他複雑化した構成を有つ社會と化しつゝあつたことは、

本土の大街道に沿ひたる村々にては農夫に出會すること  
は少く、他の色々の身分なる住民に出會すること多し。  
此等の人民は日々の賃錢にて業に就き、奴僕用のをなし

又種々の細き物を旅客に賣る人々なり。<sup>(1)</sup>

と述べてゐる外國人の旅行記等にも現はれてゐる。

前にも述べ來たやうな重苦しい威壓と、生活を續けるに必要な限度に於いてのみ、其收獲を百姓に所有せしめることを治民の原則とせる政治の下に於いては必然の運命とすべき貧困の裡に諦めの生活を營んで來た農村の人々の中には、この時勢の變化から刺激を受け、祖先傳來の農業を放棄して村を離れ、江戸や其の他の城下町に出で、武家や商家の奉公人となつたりした者が多かつたことは種々の文献に散見するが、同時に街道一筋に出て小さな店を開いて生業とする者なども尠くなかつたことは同じ外國人の旅行記が次の如く記するによつても察せられるであらう。

されば此村に(註)東海道街は兩側に軒を並べて長く延びたる

町通りなり國道はそれを兩側に見て貫くなり。町通の長  
きため一村は時として殆ど一里の四分の一も隔たれる次  
の村まで達するなり。斯如くして一村が次第に増長して  
他村と連絡するもの少からず各村の住民が我が村の名を

保たんとするために一つの村が二つの名を以つて呼ばるゝあり、又合併したる全村を其片方の名稱を以て呼ぶこともあり。<sup>(3)</sup>

「註」(1)及(3)「ケンペエル江戸參府記」

(2)「政談」「民間省要」等々。

即ちケンペエルが元祿年間に東海道を往還せる當時、沿道の村々や小さな町が目覺ましく發展、膨脹しつゝあつた面影がこれ等の簡單な記述の中にも看取せられるであらう。そして都市は勿論、それ等の宿場や、沿道の村々に於いて如何に商業が一般的に發達してゐたかは、

都市、市邑、村港に於いては多數の店舗は時に街道の兩側に沿ひて殆ど空地なきまでに櫛比して盡くこれを占むることもあり。全國を擧げて顧客とするも猶足らざるべく、吾人は顧客が何處よりかくも寄せ來り、かく澤山の賣主は如何にして自から養ふかを解し得ずして恠み驚くばかりなり。<sup>(4)</sup>

「註」(4)「ケンペエル江戸參府記」

といふ同じ旅行記の記事によつても一斑が窺はれる。その中沿道に於いて新に發展せる村や町などの商家は主として旅行者を目的とするものであつたから、それは當時に於ける主要街道の交通量が、今日我々が想像するよりも遙かに多かつたであらうことを推測せしめるに充分であらう。(

斯如き社會經濟發展の情勢は、前にも觸れて來たやうに都市に於いては勿論、地方の農村部落に於いてまでも、富の中心を貨幣經濟の使徒である商人に移動せしめ、土地經濟は貨幣經濟の壓迫に困つて次第に衰廢の過程を辿る結果となり、隨つて必然的に、土地收入を財政の基礎とせる諸大名をはじめ、それを生活の手段とせる武士、百姓等は急速に貧困化しなければならぬ状態となつた。そして江戸時代の經世家や、實學を主せる學者等が何れも、幕府及諸藩の財政的衰弱及武士百姓の貧窮時代の原因を商業の發達に歸し、商人の擡頭及其生活振りに對して嫌惡、嫉視、反感の感情を露出してゐることは、一般に知られてゐることであつて此處に一々引例するの餘裕を有たないがその中一

を拾ひ出して、當時に於ける社會の動きを透視すべき資料としよう。例へば、

「本とは農也。末とは商工也。工商盛に成て農業衰爲は代々如し此成行こと是れ亦明なること也」とか「農業を厭ひ商人と成こと近來盛にて田舎殊の外衰微す」

などと記せる「政談」の記述や前にも引用せる「粟山上書」が「農人の商人に相成候事は殊の外天下の衰微に相成候ことにて」と記してゐるなどは其の著明な一例であり、また「治國譜考證」が、

商賈を省んが爲めに利權を上にと取つて奸計の路を塞ぎ諸物の價を平かにして民の煩ひを除き郷中の市に京店物を賣ることを禁じて國都に遠き都會の地三所を限りてこれを許す（註）これは出雲國に關するものであつて三所とは杵築、今市安來）且又民國の酒店を減じ往還筋の茶店を鑿つ。蓋し商賣の數を省きて之を農に歸するの道を得玉子歟。

「註」(1)「日本經濟大典」——第二十六卷所收。

とあるなどは斯如き反商業的傾向が進んで現實に政策化せ

んとしつゝあつた事實を示すものに外ならない。其の他にもこれに類する記述は當時の文獻に屢々見出されるが、それ等は何れも、土地經濟の上に立つ封建社會が、貨幣經濟の發達に因つて苦悶しつゝある惱みの姿相を反映し、同時に新らしく伸んとするこの力が舊勢力によつて受けつゝあつた苦難の相貌を示唆するものである。

× × ×

けれ共時の勢——社會發展の必然性——は人力を以つて抑止すべくもない。江戸時代後半に於ける日本の社會は滔々として、土地經濟より貨幣經濟への發展過程を辿りつゝあり、商業の發達は殆ど全國的な時代の潮流であつたのである。商業の發達が、都市や、大街道の宿驛等の如き盛り場だけでなく、田舎の末々に至るまで、文字通り全國的な現象であつたことは既に引用せる諸文獻によりても知られるが、

元祿以後取付けて商人田舎の末々、山の奥迄も行渡に依つて金銀錢共田舎に多成行たるなり……田舎までも商人行

渡て田舎の者ども今は物を買ふことを知りたれば不斷の小用は錢にて足すこと成故、錢は皆其所により御城下へは歸り兼ねること也。

と云ひ、また

御城下の端々に家居立續きたること、亦田舎の末々迄商人の一面に行渡りぬること某覺えても元祿以後のこと也と記してゐる「政談」の記述は一層明確にそれを立證するであらう。

「註」(1)「日本經濟大典第九卷」所收。

シーボルトが「活潑なる國內貿易の本場は大阪にして國內各地より買手賣手が此市に向けて流るゝが如くに往來し……」と記述してゐる所によつて代表的に表現されてゐるやうな商人群の頻繁な道路往還は、右に一斑を窺視したやうな發會發展の動きを背景として眺めてこそ、はじめて充分に肯かれるであらう。

威風四邊を拂つて堂々と練り進んで諸大名の隊列旅行の

蔭に、封建社會の衰廢の機關の一つが潜んでをり、路上隨所に見受けられた、商人群の旅姿に、次に來るべき社會の宰相が豫示せられてゐたことを當時に於いて誰が知つてゐたであらう？（未完）

Ⅱ「參觀交代旅行」及「商人の旅」の卷終Ⅱ

武田勝頼の妻が天正十年三月三日の朝柏尾山大善寺で夫と共に死を覺悟した其の心情を理慶尼が手記したのを見ると「御臺所仰せけるやうは此寺の御本尊は藥師如來と承る、今夜これに通夜し後の世を祈らばやおもふなり、南無藥師瑠璃光如來、自ら最後すでに近づきぬるとおぼえてあり、後の世には一つ蓮の臺の縁となし給へと柏尾は韭崎より東なれば東方淨瑠璃世界を心がけたまひて斯くこそ詠じたまひけれ、西を出て東へ行きて後の世の宿柏尾とたのむ御佛」と記してある。戰國の時代に咲いて散つた美しい花の姿此手記で偲ばれる。